

# 社会表象研究の地平\*

—「生きられた文化」への眼差し—

阿 部  
古 川

潔\*\*  
彰\*\*\*

## はじめに

本稿では、現在における表象を対象とした学問領域横断的な研究動向を踏まえ、たうえで「社会表象研究」の可能性と課題について検討する。「1. 表象研究の現在」において近年高まりを見せている研究潮流である表象研究の動向、ならびにそれを生み出した社会状況の変化を検討する。と同時に、その知的潮流がはらむ困難を、山路勝彦の人類学的研究の意義を検討することによって内在的に明らかにしようとする本稿の問題設定を明示する。その問題設定に基づき「2. カルチュラル・スタディーズにおける表象分析—『生きられた文化』のゆくえ—」ならびに「3. 『村の記録』の表象をめぐる」において、それぞれメディア表象と権力、歴史表象と記録というテーマに即しつつ、山路による研究の独自性を論じる。長年にわたるフィールドワークに裏打ちされた山路の文化表象研究が従来の研究とは異なる文化位相と歴史時制に照準したものであることを確認したうえで、「5. 社会表象研究の地平」では、社会表象を分析対象とする今後の研究の課題を明らかにする。

## 1. 「表象研究」の現在

### 文化表象／社会表象という問題意識

今日の人文・社会科学の傾向のひとつとして、「文化表象」や「社会表象」への関心の高まりが指摘できる。具体的には、社会における広義の文化実践を研究する際に、その主たる分析対象としてなにかしらの「表象 (representation)」に照準を定め、たうえで、その分析を通して文化や社会のあり方を読み解こうとする研究を、ここでは「文化表象」や「社会表象」に関する諸研究とみなすことにする<sup>1)</sup>。こうした学問潮流の台頭の背景として、いわゆる「言語論的転回 (linguistic turn)」以降の言語観と文化観があることは、改めて述べるまでもないだろう。そこでは、広義の言語を用いた表象は、なにかしらの実体 (社会・文化的な本質) を模写する透明な道具ではなく、それ独自の意味付与实践 (signifying practice) を通じて社会や文化を構築する媒体として理解される<sup>2)</sup>。それゆえ、文化・社会に関する表象を分析するさいに問われるのは、それが単に正確・忠実に現実を模写しているか否かではなく、表象実践を介して「現実」がどのようなものとして構築されているのか、という社会・文化的なプロセスである。別の言葉でいえば、文化表象や社会表象の分析において重要なポイントは、表象が生み出される社会・文化的な過程であると同時に、そのよ

\*キーワード：社会表象研究、カルチュラル・スタディーズ、「村の日記」

\*\*関西学院大学社会学部教授

\*\*\*関西学院大学社会学部教授

1) 例えばジェンダー表象を主題にしたものとして、川村 2010、熊野・千野 1999、マイノリティ表象を論じたものとして、黒沢・吉見・四犬田・李 2010、異文化表象を取り上げたものとして、松田 2003など。

2) Hall, 1997.

うにして生み出された表象が、翻ってどのような社会や文化を作り出しているのか、という表象を介した現実構築の循環的な連環にほかならない。

このような表象分析は、社会学における文化研究やメディア研究のみならず、文学や美学といった人文学の領域<sup>3)</sup>、さらには人類学や民俗学といった領域<sup>4)</sup>においても積極的に取り組まれている。その点で、今日の表象研究は学際的な様相を呈しているといえよう。だが、より一般的な「文化表象」という用語と並んで「社会表象」という言葉が近年では用いられることから明らかなように、表象研究における対象は必ずしも明確かつ一義的に定義づけられているわけではない。また準拠する理論や援用される概念枠組みも「言語論的転回」以後の言語観・文化観を共通認識として有してはいても、具体的に用いられる調査方法や分析手法はけっして一様ではない。そのことを踏まえるならば、社会的・文化的な表象を研究対象とする学問潮流を「表象研究」として安易に一括りにして理解することには慎重であらねばならない。そうした認識に基づいたうえで、本稿では便宜的に「表象」を研究テーマとする知的潮流のなかでも、

1. 表象それ自体のみを分析対象とするのではなく、表象を通して社会や文化のあり方にアプローチする研究を、ここで取り上げる「表象研究」と定義づける。

そのうえで、

2. これまで主として人文科学系の学問領域において取り組まれてきた表象研究における対象を「文化表象」として位置づける。

これら「文化表象」を含みながらも、

3. メディア状況の変化等を考慮したうえで、より広範な現象として表象実践を捉えようとする研究における分析対象を「社会表象」として定義づける。

繰り返しになるが、上記の「表象研究」、「文化表象」、「社会表象」の定義づけは、本稿での議論を進める上での便宜的なものにすぎない。

## 「表象研究」が注目される時代的背景

近年、表象研究が学問領域横断的に隆盛している状況は、社会や時代の変化との関連において検討される必要がある。なぜなら、人文・社会科学の領域において「表象」への関心が高まることには、社会・文化の状況における変化が大きく関係していると考えられるからである。その点について以下では、メディア状況の変化という観点から考えていく。

デジタル・テクノロジーの発展は、さまざまな「新しいメディア」を生み出すと同時に、従来とは異なる多様な「表象」を作り出していく。映像と音声の双方に関して限りなく「本物」に近いかたちでの表象＝再現を可能にするデジタル・テクノロジーの発展と普及は、社会における表象のあり方を大きく変えていく。例えば、写真技術しか存在しなかった時代では、戦争であれ事故であれ、なにかしらの「出来事」は主として文字と写真によって表象された。それと比較して今日では、過去の出来事は多くの場合において映像と音声によって表象され、それら表象が「記録」として展示・保管されることになる。

こうしたデジタル・テクノロジーの発達にともなう表象形態の変化は、単に表象のモード＝様式だけの問題にとどまらない。例えば、デジタルカメラというテクノロジーは、人であれモノであれ事象を表象する新たな方法を作り出した。これまで何度も指摘されてきたことだが、アナログ技術を用いたコピーはあくまでオリジナル＝本物との関係において二次的・副次的なものに過ぎない。だが、デジタル・テクノロジーはオリジナルとコピーとの質的な差異を無効化する。それは、表象という観点で言えば、言語論的転回が示した「表象するもの＝シニフィアン」と「表象されるもの＝シニフィエ」との結び付きに関する恣意性ならびにシニフィアン間の示差性という原則に加えて、シニフィアンそれ自体の無限の再現性をもたらす。つまり、「シニフィエなきシニフィアン」という哲学的に論じられてきたテーマが、デジタル・テクノロジーが普及した今日の社会では、ごくごく当たり前の日常的な事象になっているので

3) 黒沢・吉見・四犬田・李 2010、小森・紅野・高橋 2000

4) 竹沢 2001、松田 2003、山路 2008

ある。

このように近年のデジタル・テクノロジーの発達のもとで、さまざまなデジタル・メディアが社会のなかに普及していくことで、社会・文化的な事象をめぐる表象が量的に拡大すると同時に、質的な変貌を遂げつつある。こうしたメディア環境の変化のもとで、さまざまな学問領域において「表象」への関心が高まっていく。その帰結として、各学問領域において表象研究がさまざまなかたちで試みられることになった。このように時代の変化との連関において表象研究の隆盛を理解することは、あながち的外れなことではないだろう。

### ポリティクスとしての表象分析

デジタル・テクノロジーの発達と普及を背景として、現代社会では多様な表象が繰り広げられるようになった。そのもとで、現実社会の状況変化に対応するかたちで学問領域横断的に表象に関する研究潮流が高まってきていることを、ここまでの議論で確認した。それでは、こうした表象研究に共通した志向性として、どのようなことを指摘できるだろうか。

第一に、先に定義づけしたように、本稿で対象とする表象研究は、ただ単に「表象するもの」＝シニフィアンの内容や形式だけを探究の対象とするのではない。むしろ、そうした「表象するもの」を分析の出発点としたうえで、「表象するもの」と「表象されるもの＝シニフィエ」との関係性（恣意性と示差性）を明らかにし、そのことを通じて文化が構築されるプロセスの解明を目指す方向性が、ここで対象とする表象研究に共通する要素として指摘できるであろう。つまり、「表象」を介して社会や文化の姿＝実状にアプローチすることが、表象研究の第一の特徴である。

では、そのように表象を介して／通して社会や文化の状況に迫ろうとする際に、なにを解明することが目指されているのだろうか。多様な様相を示す表象研究に共通する志向性を明確にすること

を目的にこれまでの諸研究を捉え直すとき、どのような特徴が浮かび上がってくるだろうか。

さまざまなメディアとの関連において多様な表象を分析対象に据えてきた文化表象研究に共通する要素として、「表象をめぐる権力」の解明への志向性が見て取れるように思われる<sup>5)</sup>。つまり、先に指摘した第一の特徴である「表象するもの」と「表象されるもの」との関連の分析を通して社会・文化の姿に迫ろうとする際の主たる問題関心は、そこにおける文化をめぐる権力作用を明らかにすることに置かれていると理解できる。とりわけ、文学研究など人文科学の伝統と社会学・政治学など社会科学の伝統の双方を採り込むかたちで文化研究の新たな地平を切り開くことを目指してきたカルチュラル・スタディーズの研究潮流における表象分析には、そうした「文化権力」への関心が顕著に見て取れる<sup>6)</sup>。極めて単純化して言えば、いわゆるカルチュラル・スタディーズの文化研究の特徴は、主たる分析対象として表象に照準を定めることによって、旧来の権力分析では必ずしも的確に把握されてこなかった文化をめぐる力関係＝ポリティクスを解明しようとする点に見て取れる。もちろん、こうした文化権力の分析のみをもって現代社会の権力分析として十分かどうかに関しては論争が絶えない<sup>7)</sup>。ここでは、権力分析としての表象分析の妥当性そのものを論じることはしない。むしろ、多様な研究に通底する問題関心として、文化や社会をめぐる表象の次元における権力への関心がこれまでの表象研究に共通して見て取れる点を確認することが、ここでの目的である。

以上見てきたように、メディア状況の変化を背景として多様な表象実践が繰り広げられる社会状況を対象とした表象研究が、学問領域横断的に盛り上がりを見せている。そして、それら研究潮流に通底する問題関心として「文化をめぐる権力」を分析／解明することへの志向性が見て取れることを、ここまでの議論で明らかにした。

5) 近代におけるナショナリティの表象をめぐる権力分析としては、李 1996参照。

6) カルチュラル・スタディーズによる表象分析における基本的な概念枠組みを教科書的に述べたものとして、Hall, 1997参照。

7) カルチュラル・スタディーズにおける権力分析を批判的に検討したものとして、Ferguson and Golding, 1997参照。

## 本稿の問い立て

### —山路の人類学研究を手掛かりに—

本稿では、時代の変化に対応した表象研究の隆盛が示す学問的意義を認めながらも、それを内在的に問い直すことを試みる。そのことを通して、社会表象研究の新たな「地平」を浮かび上がらせることを目指す。その際の方法として、人類学の領域で積み上げられてきた山路勝彦の研究成果に注目する。必ずしも当初から表象研究を目指してきたわけではない山路の文化表象をめぐる近年の研究動向に目を向けることによって、そこに現行の表象研究の陥穽や限界を乗り越えていく上での「手掛かり」を得ようとするのが、本稿での問い立てである。

近年の山路の研究（山路、2004；2006；2008）では、植民地をめぐる文化表象が中心的なテーマに据えられている。しかし後述するように、山路による植民地表象の研究は、言語論的転回以降の記号論的分析枠組みにもとづく表象分析にとどまるものではない。そこには膨大な資料の検討と地道なフィールドワークに根差した「文化のダイナミズム」への一貫した関心がある。別の言葉でいえば、文化人類学者としての山路による表象への関心には、それを根底から規定するものとして文化交流への独自の眼差しが見て取れる。この点にこそ、現行の表象分析の限界を乗り越えていく可能性が潜んでいる、と本稿では考える。

そうした問題設定のうえで、2.ではカルチュラル・スタディーズにおけるメディア表象と権力の位置づけについて、3.では「村の記録」が問いかける歴史表象と記録の関連について、それぞれに議論を展開する。

## 2. カルチュラル・スタディーズにおける表象分析

### —「生きられた文化」のゆくえ—

#### カルチュラル・スタディーズにおける表象分析

1.で述べたように、近年の研究潮流としての表象研究では、文化・社会事象に関するさまざまなメディアを介して為される表象をめぐる力関係

＝ポリティクスの解明が、主たる分析の目的に据えられている。とりわけ、一般的に「カルチュラル・スタディーズ (Cultural Studies)」と総称される研究動向においては、そうした「ポリティクスとしての表象」への関心が顕著に見て取れる。

カルチュラル・スタディーズに関する教科書的記述においてこれまで指摘されてきたように、ポリティクスという問題意識から試みられる表象分析において重要な位置を占める概念が、ナショナリティ／エスニシティ／ジェンダーなどである<sup>8)</sup>。具体的には、さまざまな表象を介して、どのような内実としてナショナリティ／エスニシティ／ジェンダーが分節・接合 (articulate) され、そうした実践を通して現実社会におけるナショナリティ／エスニシティ／ジェンダーがどのように構築されるのか。そこにどのような力関係が潜んでいるのか。そうした表象をめぐる力関係を明らかにすることが、これまでカルチュラル・スタディーズの影響を受けた研究動向において、多様な文化・社会事象を対象に為されてきた。

例えば阿部 (2001) では、戦後日本という歴史的コンテキストにおいて「ナショナルなもの」の表象がどのような政治・文化的な力関係のなかで試みられてきたかについて、「日本人論」と「テクノナショナリズム」という視点から考察を加えている。そこでは、「西洋」が「東洋」に眼差しを差し向ける際に特徴的な視座である「オリエンタリズム」が、近年のグローバル化の進展のもとで、当の東洋＝日本自身による自己像＝ナショナル・アイデンティティ構築の際に積極的に取り入れられる傾向が高まりつつことが、映画テキストや広告表現を題材に指摘される。主として政治次元でのナショナリズムに照準した従来の研究とは異なり、文化表象次元に着目したうえで、「日本らしさ」や「日本の独自性」といったナショナリティをめぐる表象がどのように変遷してきたのか、そこにどのような力関係が作用していたのかを明らかにすることが、そこでは目指されている。

また阿部 (2008) では、スポーツとメディアを対象として、そこにおいてどのようなジェンダー

8) Hall, 1997.

／セクシュアリティが紡ぎ出されるのかに分析の焦点が置かれている。人々がごく自然かつ当たり前に魅力的なものとして受けとめている「スポーツする身体 (sporting body)」の表象を介して、どのように特定のジェンダー／セクシュアリティのイメージが再生産され、それが社会におけるあるべき／目指すべき像として正当化されているかが、スポーツドキュメンタリーなどを題材に論じられる。そこで目指されているのは「スポーツする身体」を舞台としたジェンダー／セクシュアリティをめぐる表象のポリティクスにほかならない。

このように近年のカルチュラル・スタディーズの理論・概念・方法を援用したメディア文化研究では、「表象のポリティクス」に照準を定めることが問題設定ならびに議論展開のうえでの「定形」と化しているようにすら思われる。

### 「表象」を論じることの功罪をめぐって

社会・文化事象に関するさまざまな表象を主たる分析対象とし、メディアを介した表象実践における力関係を問い質すことは、たしかに従来の文化研究と権力分析に対して新たな地平を提供したものと評価できる。デジタル・テクノロジーの発達を背景として、大量かつ多様な表象実践が社会全体において繰り広げられ現代的な状況を踏まえるならば、文化と権力の関係を捉えようとする社会学的研究において「表象をめぐる闘争」が分析の中心に据えられることは、ある意味で社会状況の変化に対応した当然の帰結とも理解できる。

しかしながら、すでにこれまでにカルチュラル・スタディーズ的な立場から為されるメディア文化研究に対して、さまざまな観点から批判が加えられてきた経緯がある<sup>9)</sup>。その概要を検討することによって、文化研究において表象を中心に据えることの功罪について考えていく。その際に、政治的な指向性に関する批判（カルチュラル・スタディーズの研究が「左翼的」立場に基づく研究であることを論難するもの）は正面から検討するに

値しないと考える。むしろ、メディアと文化を批判的に研究するための方法という観点から捉えた際に明らかとなるカルチュラル・スタディーズ的な表象分析の問題点と課題を指摘する立場について、ここでは主として検討する。

第一に取り上げるべきは、政治・経済的な組織や制度の次元がカルチュラル・スタディーズの表象分析では等閑視されている、との批判である。その批判によれば、メディアを介して社会・文化事象の表象に注目し、それら表象の社会における流布や人々による消費を分析の主たる対象とするカルチュラル・スタディーズにおいては、文化をめぐる経済的生産過程や政治的規制状況の分析が必ずしも十分に為されていない。だがしかし、文化と権力の関係を解き明かすうえで、生産と規制の側面の分析こそが不可欠である。こうした論拠に基づく批判が、主として伝統的な政治経済学 (political economy) の分析方法に基づきメディア文化研究に従事する研究者たちから投げ掛けられてきた。

たしかに、文化に関する表象 (representation) への関心と比較して生産 (production) や規制 (regulation) への分析が乏しいとのカルチュラル・スタディーズへの指摘は、個別の研究の内実をみていけば当てはまることが少なくない。また、政治経済学対カルチュラル・スタディーズの対立図式は一見すると非常に分かりやすく、文化やメディアを対象とする批判的研究動向のマッピングとして便利である。しかしながら、現実にはカルチュラル・スタディーズにおいて文化の生産過程や文化生産をめぐる制度や組織の重要性が無視されているわけではない<sup>10)</sup>。英国の Open University のテキストにおいて Stuart Hall によって定式化された The Circuit of Culture の図式にも明らかなように、representation と並んで production, regulation, consumption, identity がカルチュラル・スタディーズにおける文化／メディア研究の重要概念として挙げられている<sup>11)</sup>。また同様に、政治経済学的研究の立場をとる研究者たちが、文化表象の意義をまったく認めていないわけではな

9) Curran, Morely and Walkerdine, 1996; Ferguson and Golding, 1997; McGuigan, 1992; Tester, 1994.

10) Du Gay, 1997.

11) Hall, 1997.

い。その意味で、「経済的な制度的次元を分析する政治経済学」と「文化的な表象次元を分析するカルチュラル・スタディーズ」を対立のかつ背反的に捉えることは、実態に即していないと同時に、学問論として生産的とはいえない。むしろ、政治経済学から投げ掛けられたカルチュラル・スタディーズへの批判や疑問を受けて論じるべきことは、表象分析を試みるさいに、あらゆる文化財が潜在的には商品＝モノとして生産・流通の対象になりうる現在の資本主義化された文化状況下において、どのようにして「表象」が作り出され、流布され、人々のもとへと送り届けられるのかという経済のプロセスを、どのように研究の射程に取り入れることができるのかであろう。そうしたプロセスを捉えるためには、どのような分析枠組みが必要となるのか。そうした問いを「表象研究」に突きつけられた課題として真摯に受け止めることが、何よりも求められていると考える。

カルチュラル・スタディーズの表象分析に突きつけられる批判として次に取り上げるのは、「表象された文化 (represented culture)」と比較して「生きられた文化 (lived culture)」が十分に分析されていない点への指摘である。この点をめぐる論争は、遡ればカルチュラル・スタディーズの伝統における「文化主義」と「構造主義」との対立にまで遡ることができる<sup>12)</sup>。ここで言う「生きられた文化」とは、個々の行為者の日常的な実践を重視する文化研究において中心的な位置を占める概念である。「文化主義」の立場は、個別具体的な場面において発揮される文化的創発性にこそ「文化」の意義を見出そうとする。その際に主として分析の対象に据えられるのは、人々によって生きられた日常的な文化実践にほかならない。それは、メディアによる表象とも市場に流通する商品＝モノとも異なる「本当の／真正な (authentic)」文化として位置づけられてきた。つまり、現実社会における具体的な行為者＝主体によって「生きられた」ものこそが、「本当の文化」と看做されるのである。

しかしながら、文化理解をめぐる本質主義対構築主義の論争をへて、無前提に「本当の文化」や

「文化の真正性」を措定することに対して、少なくともカルチュラル・スタディーズの流れを汲む研究においては「慎重であるべき」とする態度が広く共有されるようになった<sup>13)</sup>。要するに、なにごとであれ文化事象を研究する際に本当の／本物の文化を措定することは、カルチュラル・スタディーズにとって理論的にあまりに素朴であり政治的にナイーブに過ぎる点が、基本的な認識として広く共有されるようになった。

だがしかし、こうしたカルチュラル・スタディーズにおける文化理解をめぐる一連の理論的・思想的変遷を踏まえて、かつての「文化主義」の残滓として「生きられた文化」という概念自体を棄却することは、果たして適切だろうか。本稿では、たとえこれまでの「生きられた文化」という観点が「文化の真正性」を前提とする本質主義的な文化観に基づくものであった点を認めるとしても、「表象された文化」とは異なる位相を指す「生きられた文化」という概念自体は、いまだ文化研究において有効だと考える。なぜなら、どのような文化表象であれ、それが現実の社会的文脈において人々に受容／消費されることによってはじめて「意味あるもの」として成立するからだ。逆にいえば、デジタル・テクノロジーの発達によって社会・文化事象に関するさまざまな表象が生み出されたとしても、それが日常において個々の人々によって生きられた経験とならないかぎり、それらメディア表象は「文化＝生活様式の全体」としての意味を持たないであろう。その点で、メディアを介して「表象された文化」のみならず生活実践のなかで「生きられた文化」をも分析対象に据えるべきとの指摘は、表象研究が正面から受け止めるべき批判であると判断される。

### 「意味付与实践」を論じる位相

上で概括してきたように、カルチュラル・スタディーズ的な表象分析に対しては、これまで多くの批判が為されてきた。文化研究における概念枠組みという観点から整理するならば、それら批判の要点を「表象」が生み出される／作り出される際の「意味付与实践 (signifying practice)」を論じ

12) カルチュラル・スタディーズの伝統における「文化主義」と「構造主義」の対立に関しては、阿部 1998参照。

13) Woodward, 1997.

る位相に関する問題点の指摘として理解できる。

現実社会においてメディア表象が生み出される過程では、多くの場合に産業化された組織による特定の制度・規制の下での生産が見て取れる。それらメディア産業システムの次元を重視する立場からの批判が、主として政治経済学的な視点に基づくメディア研究の陣営から為されてきた。そこで問われていることは、意味付与实践を規定し制限する文化外在的な要因＝「政治・経済のシステム」をメディア文化研究に取り入れることの必要性である。

他方、たとえメディア表象が組織・制度からなる産業システムのもとで作られ出されているとしても、それら表象が現実社会において「意味あるもの」となるうえで、メディアを受容し消費する人々によって個別・具体的に体験される文化＝生活様式の次元が不可欠である。この認識に基づく立場から為される表象分析への批判において問われているのは、意味付与实践における表象次元に還元し尽くされえない文化内在的な要因＝「生きられた日常」にほかならない。

以上のように理解するならば、これまでカルチュラル・スタディーズ的な表象分析に加えられてきた批判は、文化研究において意味付与实践を対象化する位相に関する論難として整理できる。先に指摘したように、個別具体的なカルチュラル・スタディーズの研究業績に即してみるならば、これらの批判はある程度の射ている。だが同時に、実際のカルチュラル・スタディーズの研究潮流の展開過程でそうした批判が検討され、それを踏まえた理論・概念枠組みの精緻化が為されてきた。その意味で、かつて指摘された政治経済学対カルチュラル・スタディーズという対立図式に固執することは、現実認識において適切ではない。

だがしかし、問いかけられた批判を自らの理論枠組みに吸収／充当 (appropriation) する試みが「均等に」果たされてきたようには思われない。つまり、ある批判は十分にカルチュラル・スタディーズの表象分析の枠組みに採り込まれたが、別の批判は必ずしも適切に吸収／充当されてこなかったのではないだろうか。現行のカルチュラル・スタディーズの表象研究の動向を眺めるとき、

そうした疑念が拭い切れない。

そのことはとりわけ、「生きられた文化」と意味付与实践に関する批判的問いかけについて言える。先に言及した Hall による The Circuit of Culture の図式に典型的なように、政治経済学的な観点からの批判の受容は「生産」や「規制」という観点を取り入れることによって果たされた。それに対して「消費」「アイデンティティ」の重視は、個々人による具体的な文化実践を捉えるための概念枠組みの精緻化と言えよう。だがしかし、「生産」や「規制」という観点から捉えられる産業化されたメディア文化を前提とするかぎり、そこで問われる「消費」や「アイデンティティ」は、なかば必然的に商品＝モノを介した意味付与实践のあり方を前提としたうえで consumption / identity にならざるをえないだろう。つまり、批判を採り込んだうえで概念枠組みの精緻化の結果、かつて「文化主義」が重視していた「生きられた文化」の次元は、カルチュラル・スタディーズの表象研究において皮肉にもさらに後景に退いてしまった感を否めないのである。

## 山路による博覧会研究の意義

### 一「人間動物園」への眼差し

以上論じてきたように、「意味付与实践」という観点からカルチュラル・スタディーズ的な表象分析に突きつけられた課題を整理すると、1. で言及した山路による博覧会研究が表象研究に対して持つ独特な意義を理解する糸口が得られる。大日本帝国における博覧会を分析対象とする山路独自の表象分析は、長年にわたる地を這うようなフィールドワークに裏うちされたものであった。そこで繰り返される表象分析は、博覧会や展覧会が開催された歴史的・政治的・経済的な諸状況を資料に基づき詳細に検討すると同時に、そこでの展示内容に関する文書資料と実際に収集されたモノの分析を通じた慎重な検討に基づいている。だが興味深いことに、そこでの表象分析を根底から動機づけているのは、ただ単に「表象をめぐるポリティクス」を問い質すのとは異なる分析視角であるように思える。別の言葉でいえば、山路の博覧会研究を背後から支える問題関心は、カルチュラル・スタディーズ的な「表象のポリティク

ス」への政治的関心には決して汲み尽くされることのない、それとは別なる「文化への眼差し」であるように思われるのだ。

山路による博覧会研究を動機づける問題意識が何であるのかを考えるうえで、1910年（明治43年）に開催された日英博覧会における「人間動物園」を取り上げたNHKのテレビ番組への批判を試みた論考が示唆的である。「日英博覧会と『人間動物園』」において山路（2009）は、NHKが平成21年4月5日に放送した「シリーズ JAPAN デビュー」の第一回「アジアの“一等国”」における日英博覧会に関する番組内容を厳しく批判した。同番組では、当時の日本が日英博覧会の際に、イギリスやフランスなどの他の国を真似て、植民地の人々＝台湾先住民族パイワン族を展示したことが紹介される。そのうえで、その展示内容は非人道的に植民地先住民族の生活を当地＝イギリスの人々に晒す点において「人間動物園」にほかならなかったことが指摘される。この点に関して山路は、NHKの番組内容では当時の世界情勢のなかで日本が置かれていた位置、ならびにそのことに起因する西洋諸国とアジアにおける日本植民地双方との日本の複雑な力関係が適切に描き出されておらず、その結果、植民地先住民族を「人間動物園」として展示したことの責任が、全面的に日本にのみ帰される論理構成になってしまっている点を厳しく論難する。

山路が論文冒頭で示しているように、NHKへの批判の矛先は「歴史認識」の解釈に関わるものではなく、番組における「論理」が妥当性を欠いている点に向けられる。つまり「人間動物園」を取り上げたメディア言説への批判は、あくまで歴史的事実に基づき論理的に議論を展開すべきとの学問的立場から加えられている。この点は、同番組がインターネットの掲示板などでも盛んに取り上げられ「NHKの偏向報道」や「捏造された内容」として非難されたさいに、そこで主として問われていたのが、アジアにおける日本の過去の歴史に関する認識をめぐる政治的党派性であったことと対照的である。

論文導入部分でNHKの番組内容の一面性を指摘したうえで、山路は日英博覧会当時の政治・社会情勢等を踏まえつつ、博覧会開催に至った経緯

と博覧会の内実を詳細に検討していく。そこでは、台湾先住民族パイワン族のみならずアイヌ民族も「展示」されていたこと、さらには、日本人自身も職人・芸人としてロンドンの人々の好奇のまなざしのもとに「展示」されていたことが、当時の資料の検討を通じて詳らかにされる。それは山路による博覧会研究の真骨頂と言えよう。だがここでは、博覧会という表象の祭典をとりまく社会・文化的コンテクストを検討する山路の人類学的研究の内実の詳細ではなく、そのことを通して山路が目指していることに着目する。NHKの番組への批判を出発点として日英博覧会に対して再検討を加えることで、山路は一体なにを試みようとしたのか。ここでは、その点に目を向けてみたい。

それを知るヒントは、論文最終パラグラフにおいて「最後に一言。」との断りによって、いささか唐突に述べられる「救い」にあると思われる。帝国主義的な世界情勢のなかで、台湾先住民のみならずアイヌの人々もまた「人間動物園」的な展示の対象にされていた。そのことを史実に基づき学術的に論じた同論考の最後で山路は、「異文化理解」が生じる現実社会での現場のありさまとその可能性について言及している。少し長くなるが論文最後のパラグラフ全文を以下に引用する。

最後に一言。帝国の見せ物ではあったが、この博覧会には救いがなかったわけではない。それは、アイヌやパイワンに見る異文化理解のありようでもあった。ロンドンで見世物とされつつも、アイヌ民族やパイワン族は異文化理解への努力を惜しまなかった事実は、ここでも強調しておいてよい。帝国主義が隆盛をきわめ、栄華を見つけた時代、「人種主義」に基づいた見せ物展示に熱狂していた時代に行われた日英博覧会でも、この両民族は、単に歴史の一齣として語るだけでは済まされない豊かな世界の存在を後世に残してくれたのである。それだから、アイヌやパイワンの貴重な体験を抜きにして日英博覧会を語ろうとすれば、それは空疎な内容でしかないだろう。人類学が歴史研究で貴重な貢献をするには、こうした微細な人間模様を描き出すことにあると思う。アイヌ民族やパイ

ワン族がロンドンでの生活をどのように生きたのか、この視点から日英博覧会を考え直すのが本稿の意図するところであり、この点にこそ日英博覧会の意義を認めたいのである。(山路 2009: 24)

ここからは、山路がなぜ厳しい批判をNHKの番組に対して投げ掛けたのか、その理由が窺える。それは決して、歴史認識・解釈をめぐる党派的な論争のためではない。そうではなく、学問的な観点から捉えた際に同番組の内容が明らかに一面的であることを研究者として毅然と指摘することが、批判の動機をなしている。と同時に、より根底的な問いかけとして、「人間動物園」という「刺激的で」かつ「新しい概念」を用いるあまり、当時の現実状況のもとで生じていた文化をめぐる複雑な動きが見えなくなることに對する人類学者という文化実践者としての憤りが、そこに垣間みられる。

このように山路による日英博覧会の再検討の目論みを解釈することで、そこでの議論がカルチュラル・スタディーズ的な表象研究に対して持つ意義がなにであるかが、おのずと明らかになるだろう。「人間動物園」に展示されるべく「遠方からロンドンに連れて来られた」パイワン族やアイヌ民族たちが当地で得た「貴重な体験」とそれがもたらした「豊かな世界」は、博覧会に関する政治・制度次元の分析や展示内容の検討だけでは捉え切れない「微細な人間模様」を介して生み出されていた。そうであるならば、当事者たちが日常実践のなかで試みた「異文化理解への努力」を、帝国主義的な文化的支配から脱するための「救い」として汲み取るうえで、「たくましい心性」をもった多様な当事者たちの「生きられた文化」に向けられた学問的かつ実践的な眼差しが必要不可欠であろう。山路独自の展覧会研究は、昨今のカルチュラル・スタディーズ的な表象研究において見失われがちな、当事者たちが自らの日常実践を

通して発揮する「たくましさ」や「したたかさ」との関連で文化の創造性を検討するという課題に對して、多大な示唆を与えてくれる。

### 3. 「村の記録」の表象をめぐる

歴史は現在を問う営為であり、社会学や人類学的な歴史研究もちろん例外ではない。そうした歴史もまた、近年の歴史研究の多くがそうであるように、これまで述べてきたような表象実践、つまり経験されたこと、経験の痕跡についての意味付与実践として読み解くことができる。なかでもポストコロニアル状況をめぐる人類学研究はそれを如実に物語っている。山路の近年の研究も植民地をめぐる文化表象研究と位置づけてよい。

しかし、山路の植民地をめぐる文化表象研究のもつ独自性は、歴史表象を単に表象された文化事象として現在の同時的な空間に配列しなおして「表象のポリティクス」を論じるのではなく、1.でも述べたように歴史事象を現在と交流する事象として時間軸のなかにもういちど埋め込むことを通して、「生きられた文化」として分析しようとするところにある。その試みはたちどころに本質主義として批判のまともになりかねない危険性をはらんでいるのであるが、山路は地を這うようなフィールドワークの経験のなかで、語り、地形、記念碑、写真、文書などあらゆる文化事象を取り出し、その時々文脈に配列することを通して、歴史的な現在と生きられた歴史との文化交流を試みることで、文化理解における本質主義／構築主義の隘路を抜け出そうとする。

本節ではこれまでの記述スタイルを大きく逸脱することになるが、この山路の歴史的な現在と生きられた歴史との文化交流という眼差しを補助線に、村に残され書き継がれてもいる記録から村の経験を再構成する作業を続けている「[村の日記]研究会」の実践をたどりながら、歴史表象と記録との関連について考えてみたい<sup>14)</sup>。

14) 「[村の日記]研究会」は歴史学や民俗学の大学院生が知内に住み込んで、知内住民とともに「知内研究所」を開いて、知内区有文書を中心とした知内研究を実践している。「村の日記」研究は1980年代のはじめに鳥越皓之、嘉田由紀子、松田素二、桜井厚、大槻恵美、伊藤康宏らとともに古川が開始し、現在に至っている。「[村の日記]研究会」はその後継プロジェクトとして位置づけてもよいが、上記のように研究スタイルは大きく異なっている。

## 村の日記

滋賀県高島市マキノ町知内地区（以下、知内）では区長が日録をつけている。いつからつけているのかは不明だが、すくなくとも現存するもっとも古い日録は『記録』と表紙に書かれた1745年のものである。それから途絶えることなく現在までの約260年間、それは書き続けられている。書き手はそれぞれの時期の村の長（もしくは書役、書記）である。ときどき帳面が大部になると新しい帳面に替えられ、古い帳面は帳蔵と呼ばれる知内の文書庫に納められる。安政6（1859）年に始まる『記録』のはじめには次のように記されている。

此記録帳之儀、古帳甚大帳ニ相成候ニ付、安政六巳年新帳相認メ申候

これらの帳面を総称して以下では『記録』と呼んでおく<sup>15)</sup>。

村の日記の内容は、時期によって、書き手によって異なるが、村の役所（藩政期には代官所）への差し出し文書の写し、役所からの通達、村の総会や役員会などの議事、溝浚えなどの村の行事、火事や災害など村の出来事、婚を除く冠婚葬祭などなど、書くべしとされたこと、書き残したと思ったことなどである。

知内には『記録』以外にも数千の古文書が帳蔵や公民館に残されているのだが、私たちのように研究として文書を読もうとする者にとって、『記録』はそれらの多種多様な文書のインデックスであり、文書間の関連や時代背景を教えてくれる役割をはたしている<sup>16)</sup>。

## 村の記録の読み方／読まれ方

1981年の夏、知内を訪れ、地区で古文書を読んでいる方に帳蔵に案内されて見せてもらったのが1745年から1948年までの15冊の『記録』だった。

知内の方はよくもこんなに営々と書いて、そして残してこられましたねという私たちに、いまでも区長が書いていますとの方が平然と言われたことばに、それまでの私の古文書イメージはおおしく揺すぶられた。過去の歴史を知るてがかりではあっても、現在とは切り離された歴史の痕跡というのがそれまでの私の古文書イメージだったのである。

過去を過去として切り取り、配列し、現在を因果関係として理解し、さらにそれを抽象化し、一般化する作業こそが、空間的にも時間的にもローカルなもの資料化に期待され、その力は特権的に研究者に与えられている。そのことを批判しながらも古文書をいまの暮らしの中に生きるものとして読み取るという、いまでは当たり前に語られることをそのとき初めて知ることになったのだ。それからの知内でのフィールドワークは、歴史を分類される時間と理解することから、歴史を継起する時間であると理解しなおす作業だった。

古文書へのその眼差しの転換は、その時間と空間を平板な「現在」と「過去」という分類的時間、分類的空間の理解から、現在と過去とそして未来との間のなにがしかがやりとりされている「場」（継起する空間、継起する時間）として理解することを促す。さらにそれは、自分のフィルター／時代のフィルターを通してある時間とある空間を理解していることへの反省を経て、当事者のフィルターを通して理解しなおすことを要求し、生きられた世界が自ら語り出すことを経験する場へと私たちを導くことになった。

## 『記録』をめぐるむら人の実践

「村の日記」研究会」は2010年2月に歴代の区長に集まってもらって「村の日記」についての座談会を開催した、そのメモ（「村の日記」研究会（編）2010：73-74）から知内の人びとにとっての『記録』の意味を見てみよう。

- 15) 私たちが、許可を得て「村の日記—江州知内村記録」として翻刻を紀要に掲載しはじめた1987年以来、私たちは『記録』を「村の日記」と呼んでいる。1948年までの記録は全て翻刻し、紀要に掲載した。2008年にはそれらをまとめて古川彰編（2008）として少数印刷発行した。1948年から2008年までの『記録』も翻刻を終えているが公表していないし、今後も公表する予定はない。なお、滋賀県の村にはこのような『記録』に相当するものが多数残されているようであるが、わたし自身が読んだ（翻刻した）のは知内『記録』だけである。
- 16) それらの文書は現在も「村の日記」研究会」メンバーが地区の人びとと共に勉強会を重ねながら、整理し、目録をつくり、翻刻をすすめている。その様子については「村の日記」研究会編（2010）で詳しく紹介した。

区長経験者（K）：区長になったらとにかく一年間の行事が無事になんとかやらなあかんという事で、一年目は一生懸命、前年度の『記録』を見ながら、そして漏れがないか一生懸命。二年目から慣れてちょっと応用が効くようになって。そういう古いもん見るちゅうことは無かった。

研究会メンバー：ということは、区長さんになられて、去年はどうだったかなとかたちで去年の『記録』を見るということはあるんですか。

K：それはある。

研究会メンバー：そういう形でこの『記録』を利用するという意識を書かれていますか、次の区長さんにわかるために。

K：ええかげんなことは書けへん。区長になったとたんに、台風が来るとなると被害がでないように、火事が出ないようにとか常に村が安全であるように思って。二年目はちょっと気が楽（笑）。

知内での無事の暮らしを得るために人びとは可能な限り同じ事を繰り返す。『記録』の記録者はその繰り返しのための確認として『記録』を繰り返し、何事も無ければ無事に終えたことを記録する。それでも引き起こされる小さな変異のときにも『記録』を確認し、変異に対応する。そしてその対応を記録するのである。だからといって、過去からの『記録』すべてが区長によって読まれることはない。

研究会メンバー：実際みなさんはこの帳蔵にある『記録』というのは見られたことありますか。

元区長（H）：帳蔵なんか見てへんやろ。

K：村の用事で一生懸命で、『記録』をもう一回見る必要性というか、機会はなかった。

H：見せてもくれへんなんだろう。

しかし、先に見た安政6年の『記録』は書き出しに続いて次のような事を書いている。

古キ事者、古帳を以相調可申候事

2010年に前区長らによって語られる言葉と安政6年の記述との同質性は疑うべくもない。100年前も200年前も同様にして区長（村の長）は『記録』とともに生きているようである。こうして繰り返されてきたはずの知内も200年前と100年前といま現在では、同じ暮らしを繰り返しているわけではない。知内の内も外もまったく違う世界になっている。伝承され、継承されながら繰り返されているはずの時間の中で、微細な変化が創り出しているのが現在だとすれば、大きく変化したなにものかと変化するなにものかをレイヤーとして場を形成している。知内の場合は『記録』という形でレイヤーの断面を見せてくれることがあるということだ。

知内では、過去は『記録』のなかに溶け込み、『記録』は現在に溶け込んでいる。アナール学派やポール・ギルロイの社会史の持っていた面白さは、この溶け合う過去と現在を『記録』とは別のさまざまな道具を使って、その断面の一部を、こんな時間が生きられてきたのだと新しい時間性として、あざやかな切り口を見せてくれたところにある。そこでも伝承・継承の場、人びと、時間そのものの継続と継起が想定されているのだ。それは地面に打ち付けられた事実の表象論ともいえるべき論の立て方であった。

### 歴史表象と時間軸

山路（2006）の長い引用をもってこの節を終えることにしよう。山路は近代日本の海外学術調査を論じる中で、今西錦司と秋葉隆・泉精一を比較しながら次のように彼らの調査研究を切り分ける。「秋葉隆や泉精一の調査は木目細かく、専門的知識をもたらずという貢献をしている。しかし、この二人の報告には、まるで対象社会を実験室のなかに閉じ込め、調査者はガラス越しに観察しているかのような姿勢が濃厚である。聞き書きでえた資料を客観的に分析し、記述すること自体はまちがっていない。しかしながら、実験室で観察されたオロチョン族が、大昔からの狩猟生活を営み続ける人たちで、「未開幻想」に彩られたロマンティストの欲望を満足させる存在としてしか表現されなかったとしたら、大きな問題である。秋葉や泉は実験室での作業に気をとられ、当時の

オロチョン族のおかれていた社会状況が読めていなかったようである。」(山路 2006:101)と。そして今西の調査経験を通して、私たちは「研究対象になった社会はたえず変化の過程にあり、それゆえ社会変化をみすえたうえで調査活動を行うことが必要」(山路 2006:100-101)だということを引き出している。

いっけんここに書かれていることは、調査者と被調査者の関係の一般的な認識に過ぎないように見える。だが、山路が述べようとしているのは、村の記録を通して理解したように、生きられた歴史／生きられた記録と私たち調査者の記録、そしていまそこに暮らす人びとの語りとの間を往たり来たりする、思考の回路、実践の態度の重要性、つまり時間軸を抜き取られた歴史表象の危うさについてなのだとあらためて気付かされるのである。

#### 4. 社会表象研究の地平

ここまでの議論で明らかにしてきたように、山路による人類学的観点から積み上げられてきた研究は、表象研究の限界と可能性を考えていくうえで多くの示唆を与えてくる。2.ならび3.での議論の要点を整理すれば、以下の通りである。

カルチュラル・スタディーズの観点から為されるメディア文化研究では、表象をめぐるポリティクスを解明すべく、さまざまな題材を対象とした表象分析が試みられてきた。しかし同時に、さまざまなメディアを介して表象される文化それ自体を包み込む、日常的な生活実践のなかで生きられた文化への視座が、そこでは相対的に後退していった感は否めない。その結果、カルチュラル・スタディーズの研究潮流において「表象をめぐる闘争」が明確に主題化された一方で、労働者文化研究に根差した初期カルチュラル・スタディーズを特徴づけていた生きられた文化を介しての闘争(階級闘争としての文化闘争)への関心は低下していった。皮肉なことに、文化のポリティクスを問うことを中心に据えたカルチュラル・スタディーズが知的にもはやされるなかで、日常的な文化実践におけるダイナミズムは正面から取り

上げられなくなったのである。

こうした研究状況に対して、山路の人類学的な観点からの表象研究はポリティクスとは別なる分析視覚を提供してくれる。山路の研究では、異文化が研究対象とされる際に、そのポリティクス以上にインターコース=交渉/交流に関心が向けられる。つまり、たとえ植民地支配という明確な権力関係のもとにあったとしても、現実社会を生きる人々の生活実践を介して、そこになにかしらの文化交流が生まれざるを得ない。それは政治・経済制度の分析だけでは捉え切れない、より日常的な次元に根差した他者との交渉である。山路人類学が光を当てるのは、そうした現実社会を生きる人々によって交わされる文化のやり取り=インターコースにほかならない(山路 2004)。支配か従属か、抑圧か抵抗かといった二項対立的な図式にもとづくポリティクス分析ではなく、外在的な視座にもとづく概念枠組みからどうしても漏れ出てしまう文化実践の過剰さ=豊穡さを、地道なフィールドワークと丁寧な文献資料検討を通して記述することを、山路の研究は目指してきたように思われる。

ここから得られる社会表象研究の課題とは、以下のようなものである。ただ単に「表象された文化」をポリティクスという観点から分析するだけでなく、現代社会に溢れるメディア表象の生産と受容自体を規定するコンテクストでもある「生きられた文化」に潜むダイナミズムを的確に捉えること。それが果たされたとき、激変するメディア状況に対応した表象研究が高まりを見せながらも、ある面で状況自体に引きずられるかたちで日常生活実践次元での文化交流(cultural intercourse)への眼差しが希薄化している現行の研究動向に対して、批判的な介入がなされ得るだろう。

山路が鮮やかに描き出したように、人々の日常生活次元での実践は「たくましさ」や「したたかさ」に支えられた文化的な創造性を秘めている。そのことはなにも、山路が対象とした「植民地下の先住民族」だけに当てはまることではないだろう。現在、グローバル化の暴力が世界中に広まり、さまざまな地域においてさまざまな人々が経済的・政治的・文化的な窮状に追いやられてい

る。そうした世界を分析対象とするカルチュラル・スタディーズにとって、絶対的で圧倒的な権力関係のただ中においても潰えることのない「生きられた文化」の可能性を丁寧に浮かび上がらせることは、きわめて意義のある理論的かつ実践的な課題であるに違いない。

「生きられた文化」の可能性は、村の記録と歴史表象との関係の議論からも浮き彫りにされている。山路の歴史的な現在と生きられた歴史との文化交流という眼差しを補助線に、生活実践としての記録と調査者の眼差しの交差という事例を通して社会表象研究における「生きられた文化」の可能性を論じた。そこでは「生きられた文化」の社会表象研究を、歴史表象からさえも抜き取られようとする時間軸の復権によって可能ならしめようとする。それは山路が日本の植民地における今西錦司などの初期人類学者の調査態度に見いだした生活者の実践としての「生きられた文化」を掬い取る方法でもあった。

以上述べたように、文化表象／交流をめぐる山路の人類学的研究は、文化を捉える位相と時制の双方の点において、表象研究における重要な地平を照らし出すものとして評価することが可能である。

社会表象研究は、デジタル・メディアの普及に伴う表象の多様化と多元化に対応した今日的な知的潮流として理解することができる。それは、時代／社会の変化の最先端に照準しようとする点できわめて「社会的」な試みと言える。しかし同時に、そこには激変する社会・文化的なコンテクスト自体に研究動向が飲み込まれ、批判的な距離を取れなくなる危険性も見取れる。改めて言うまでもなく、知的に先端であるためには、主題が先端的であるだけでなく、それ自体を対象化し相対視する理論と方法が不可欠である。その点を鑑みると、現在の社会表象研究には、何が必要とされているのか。どのような理論的／方法論的な地平を切り開くことが、これからの社会表象研究の課題なのか。それらの点について本稿では、山路の人類学的表象研究をひとつの手掛かりとして内在的に検討することを試みた。そこから見えてきたのは、つねに社会における権力作用のただ中

にあり、過去からの伝承と未来への継承の狭間に置かれながら、いま現在の「生きられた文化」が日々の日常実践のなかで発揮している独自の可能性にこそ、社会表象研究は分析の眼差しを向ける必要があるということであった。

## 文献

- 阿部潔 1998『公共圏とコミュニケーション』ミネルヴァ書房
- 阿部潔 2001『彷徨えるナショナリズム』世界思想社
- 阿部潔 2008『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』世界思想社
- 川村邦光(編) 2010『セクシュアリティの表象と身体』臨川書店
- 熊野敬聡・千野香織(編) 1999『女?日本?美? — 新たなジェンダー批評に向けて—』慶応義塾大学出版会
- 黒沢清、吉見俊哉、四方田犬彦、李鳳宇(編) 2010『スクリーンのなかの他者』岩波書店
- 小林康夫、松浦寿輝(編) 2000『メディア—表象のポリティクス』東京大学出版会
- 小森陽一・紅野謙介・高橋修(編) 1997『メディア・表象・イデオロギー — 明治三十年代の文化研究—』小沢書店
- 竹沢尚一郎 2001『表象の植民地帝国—近代フランスと人文諸科学』世界思想社
- 田中純 2008『政治の美学—権力と表象』東京大学出版会
- 古川彰(編) 鎌谷かおる・伊藤康宏校訂 2008『村の日記—江州知内村記録翻刻 1745-1948』関西学院大学社会学部古川研究室
- 松田京子 2003『帝国の視線—博覧会と異文化表象』吉川弘文堂
- 「村の日記」研究会(編) 2010『暮らしと歴史のまなび 方—知内「村の日記」からの出発』関西学院大学社会学部古川研究室
- 山路勝彦 2004『日本の植民地統治 —〈無主の野蛮人〉—という言説の展開—』日本図書センター
- 山地勝彦 2006『近代日本の海外学術調査』日本史リブレット64、山川出版社
- 山地勝彦 2008『近代日本の植民地博覧会』風響社
- 山路勝彦 2009『日英博覧会と「人間動物園」』『関西学院大学社会学部紀要』第108号、pp. 1-27.
- 李 孝徳 1996『表象空間の近代 — 明治「日本」のメディア編制』新曜社
- Curran, J., Morley, D. and Walkerdine, V. (eds.) 1996, *Cultural Studies and Communications*, London: Arnold.
- Du Gay, P. (ed.) 1997, *Production of Culture/Culture of*

*Production*, London: Sage Publication.

Ferguson, M. and Golding, P. (eds.) 1997, *Cultural Studies in Question*, London: Sage Publication.

Hall, S. (ed.) 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage Publication.

McGuigan, J. 1992, *Cultural Populism*, London: Routledge.

Tester, K. 1994, *Media, Culture and Morality*, London: Routledge.

Woodward, K. (ed.) 1997, *Identity and Difference*, London: Sage Publication.

## Towards a new horizon for studies of social representations: Considerations on the conceptual relevance of ‘lived culture’

### ABSTRACT

Studies of social representations seem to be on the rise in a variety of the academic fields: sociology, social and cultural anthropology, literature, film studies, media studies, and so on. While the academic trend of studies of social representation has paved the way for new critical research into culture and society, its theoretical characteristic of focusing on representational rather than practical dimensions of cultures has been questioned and criticized by researchers working on the political economy of cultural production. After reconsidering the theoretical merits and limitations of recent studies of social representation, most of which lie in the realm of cultural studies, this paper tries to shed new light on the discussion of the theoretical and practical tasks of studies of social representation. Paying attention to the conceptual relevance of ‘lived culture’ in analyzing politics and history of everyday culture, we consider the intellectual distinctiveness of Katsuhiko Yamaji’s anthropological research on cultural representation in the era of Japan’s colonization of Asian nations. We conclude that Yamaji’s anthropology contains a lot of rich suggestions for future studies of social representation that can make not only politics, but also potential interaction between different cultures understandable.

**Key Words:** studies of social representation, cultural studies, Village Diaries